連載 巻頭エッセイ 第四十六回

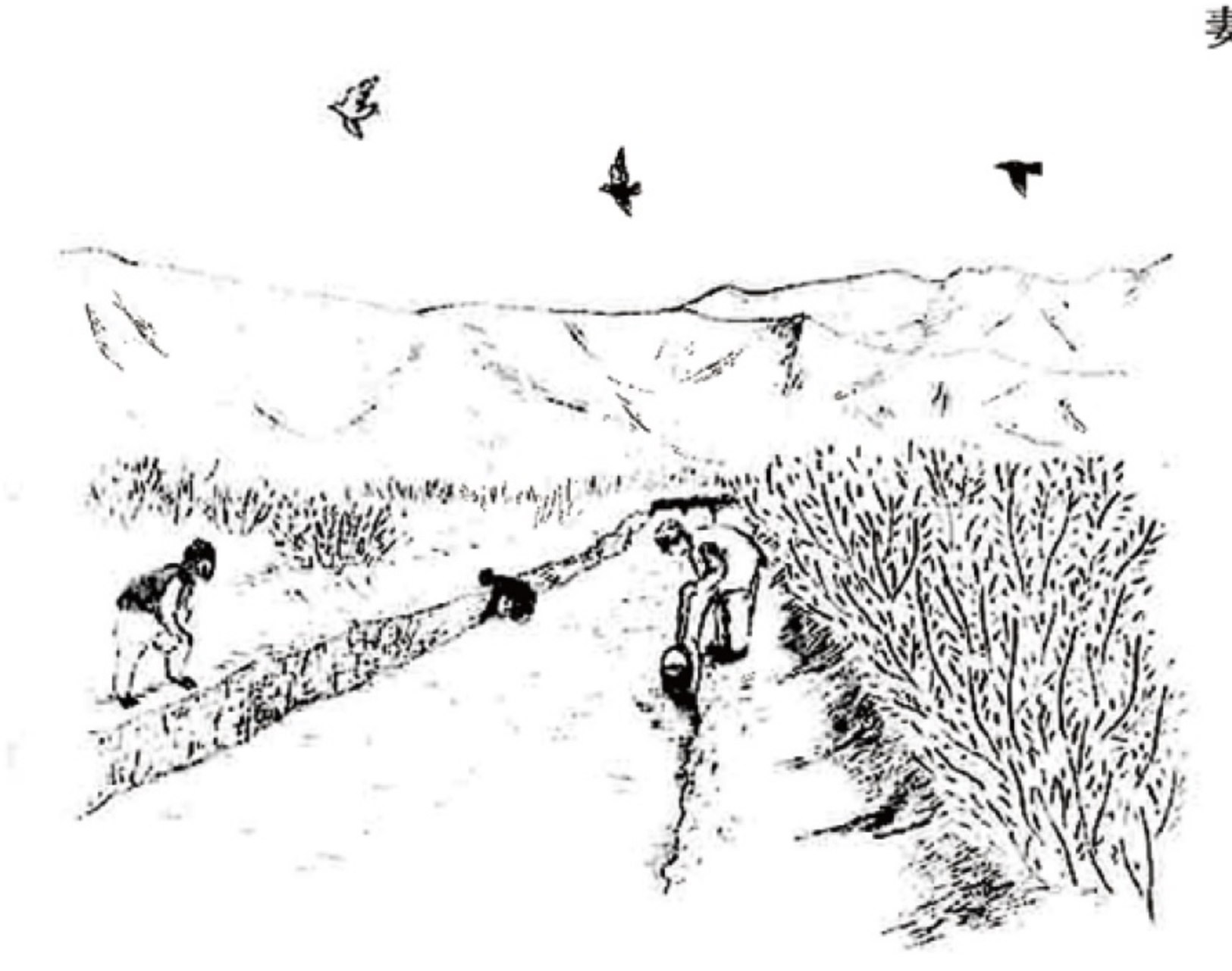
朝の紅顔 夕の白骨

「一冊の本は一粒のこぼれ種。
風や鳥や人に遠くまで運ばれて、いつか
見渡す限りの花畑になる」
2014年まで本誌で対談連載を4年間に
わたって続けた故菅原文太さんの
妻・文子さんの初エッセイ。

Illustration: Tamae Mizukami

自然界には、木の葉一枚、石ころ一つ、小さな瀬音にもバーチャルは無く、リアルの勁さ、そして儚さが心を惹く。虫の喰った落ち葉でさえ、何と美しいのだろう。拾って、亡き人々の写真の前に置く。明日は踏まれて土に還る木の葉一枚にも、無窮無辺の時が詰まっている。自然界の謎と驚きを身近に暮らす日々には、世の富には換え難い愉しみがある。

この季節の八ヶ岳颪は、とりわけ厳しい。地上も空も風が雄叫びを上げ、すっかり葉を落とした木々の枝がきしみ、苦し気に唸っている。だが寒風を突いて、冬の小鳥たちが小さな群れを作って飛ぶのを見る。命の羽音を聞くと、寒さで固まっていた気持ちが体温をとり戻す。



菅原文子

すがわら・ふみこ
1942年東京生まれ。65年立教大学文学部卒。90年初め頃、脱巨大都市東京の意向に夫菅原文太さんともに異存無く、岐阜県飛騨地方の清見村、福岡県福岡市などを転々。2009年文太さんの発案で友人たちと山梨県北杜市で無農薬有機農業を始める。14年11月文太さんが亡くなった後も同地で苦労と楽しさ半々の農業に従事中。

冬こそ医食同源が、一番の寒さ対策だ。蛋白質も大事だが、野菜ファーストで行きましょう。野菜には多くの栄養素と機能性成分があり、三度の食事には欠かせない。医食同源を意味する英語の表現は、たとえばYou are what you eat. あなたが食べたものが、今のあなた（の健康）だ。食べてきたもので今の自分がいるなら、生きものとしては、食の安全に意を注ぐ。こだわりの無農薬農業の原点だ。食料品の多くを輸入に頼る日本だが、それを可能にしているのは、平和のもたらす恩恵だ。世界各国の美味を楽しみ、オリンピックを心待ちにしているあなたなら、平和を守る最後の砦は、憲法九条であることを思い出そう。

EUとの経済連携協定（EPA）で、近頃は店頭にフランス産のチーズや菓子を見る。これが、私的には、日本産より安くておいしい。なぜフランス産のチーズは安いのか。EU各国の付加価値税（日本の消費税にあたる）はまちまちだが、フランスではとりわけ軽減税率が細かく規定されている。たとえば未加工の農水産物やレストランの食事などは十%、水、食品のほとんどと書籍は五・五%、雑誌、新聞、医薬品などは二・一%、医療費、学校教育、切手、競馬などは非課税になっている。命を守る水や食品の税率が低く、教養や娯楽にも配慮されている。徴税理念が合理的で、一本筋が通っている。人間を大切にする思想が、政治に深く根を下ろしているのだ。日本の徴税思想は、国家護持が中心で、国民（人間）は二の次だ。国民は未だに臣民、というわけだ。臣民状態に満足している人々が多いせいもある。令和行事で目立った皇室への敬愛の熱烈な表現が、隷従と紙一重に見えた。豊かな水と、海の幸、山の幸に恵まれた日本列島人は、その恵まれた風土の産着にくるまれた赤子のままに成人し、老いてゆくのだろうか。この国がどこに向かっているのか、憂いと楽観が交錯する。

アフガニスタン復興に渾身の生涯を送った中村哲医師が亡くなられた。

悲しみは、現地アフガニスタンの人々、活動を支えたペシャワール会職員の皆様と共にある。日本中が悲しんでいる。世界の心ある人々と共に。日本の畳の上で死ぬより、一身を捧げたアフガンの大地に斃れたことは、中村医師の本望ではなかったか。志を完遂せずにこの世の命を終わろうとも、その霊魂は、慕う人々の心の中に永遠に生き続ける。肉体は悠久の時空の彼方に消えようとも、その思いはこの世に残る。アフガニスタンの人々に平和と豊かな暮らしが築かれる日まで。

アメリカもロシアも、正義と抑止力の名のもとに軍を進め、武力を使った内政干渉と支配を終える時だ。なぜ

なら中村医師がアフガンの人々と共に、武力なくしてアフガンに農地と安らかな暮らしが戻ることを証明したからだ。アメリカもロシアも国内に問題をかかえている。自国内の安定と繁栄にさらに力を尽くし、その築いた富と力は、医療と食料として貧しい国に届ける転換のときだ。それは日本も同じだ。日本は戦後、限りなく小さな武力にとどめることで安定と富と平和を築いた。武力が大きくなれば、国民は貧しくなる。アメリカがそれを証明している。中村哲医師、翁長雄志前沖縄県知事の魂がこの世にあることを、その意志を阻もうとする人々は覚えておいた方がいい。また、思いを尽くして生きた人々を慕い、意志を受け継ぐ数多の無名の人々を畏れた方がいい。けっして屈することが無いのだから。

二〇一二年末に、本誌『本の窓』で中村医師と夫は対談をしている。中村医師は飄々と語る。

「よく『大変ですね』って言われるんですけど、ここで働いているのがいちばん幸せ（笑）」

対談を楽しむ夫の表情は、この上なく上機嫌だ。一途で一徹な中村医師と二人、共に頭に白髪を頂き、生き抜いた人の貫禄とオーラがある。「ここで働いているのがいちばん幸せ」だったアフガニスタンで、中村医師はなぜ狙撃されたのか。車に同乗していた五人すべてを抹殺するというプロフェッショナルなテロの手口には、目撃者を消すという狙撃者の強い意志が見える。ISの荒っぽいやり方とは手口が違うのではないか。ISなら誘拐して莫大な身代金を要求するだろう。そしてすぐに犯行声明が出ただろう。中村医師の大きな存在が目障りだったのは誰か。何としてでも排除したい動機は、誰にあるだろうか。可能性の一つとして仮定しても良いのはアメリカの影だ。日本人にイスラム圏への憎しみを煽り、日本国憲法九条改変の機運を高め、イラン危機をめぐる有志連合への武力参加の道を拓きたいのは米国軍産複合体の望むところだろう。アフガニスタンに軍隊を置く米国軍部は、武力そのものに明確に拒否感を示し、人道的手段でアフガンに復興の道を拓いた中村医師は目障りだっただろう。二〇一三年九月に、中村医師が「福岡アジア文化賞大賞」を受賞された折に、福岡でのお祝いのパーティに夫と私は出席した。中村先生に「次はノーベル平和賞ですね」と申し上げたら、「自分はアメリカに嫌われてるからくれないよ」と笑っておられた。

『本の窓』の対談で、

「必要とされなくなるまで働きたい。昔の人は天命と言いましたが、天命というのは人間にわからないようになっているんですね」

と、語っている。愛の人、中村医師は、死を覚悟した戦士でもあったのだろう。同志として共にアフガンの大地で働いた伊藤和也さんが誘拐されて殺害されたのが二〇〇八年。柩に納められた伊藤和也さんの顔を目に焼きつけるかのように凝視した中村医師は敬礼の姿勢をとった。心に誓われたことだろう。君の死に報いるためにこの仕事をやり遂げる、と。

アフガンにその天命を捧げた中村医師の鮮烈な生き方が私たちに示すのは、イスラム圏への憎しみを私たちはけっして抱いてはならず、もっとイスラム圏への知識と理解を深める努力をすることだろう。そのための良書は少なくない。最近読んだ一冊に『**テロリストの誕生－イスラム過激派テロの虚像と実像**』（国末憲人著　草思社刊）が、テロの手先に使われるイスラム圏出身の若者たちの悲劇を追跡調査し、十把一絡げではない虚実に迫る冷静な分析が読みごたえがある。若干読みにくいのは、朝日新聞ヨーロッパ総局長を務める著者の軸足がフランスに沈み込み過ぎ、日本人としての著者が、広く日本人読者に読ませたいという熱い肉声が弱く、日本人としての意識的な軸足が見えないせいもある。しかし著者の人間を見る目の公正さは一朝一夕にできるものではなく、信頼できる良書だ。

八ヶ岳の別荘を終活で整理しようと片付けた際、金で買えるものは整理し、金で買えないものを残した。その中に、夫が晩年に書いた一枚の色紙がある。

心は湖水に隨って共に悠悠たり

この言葉は、唐代の大政治家であり、高名な詩人でもあった張説の「送梁六」の一節であると、編集部より教えられた。酒豪でもあった夫は、友と酒と山河を称える漢詩の世界を愛し、我が意を得たりの気持ちでいたようだ。悪戦苦闘し、時に善戦健闘した人生の晩年に辿り着いたのが、このように明鏡止水の境地であったことがうれしく、また安堵する。

愛は仄かで、命の灯が消えてからかえって輝く。名誉でも富でもなく、人への愛において天命に従った中村哲医師、翁長雄志前知事と、それを支えたすべての人々の天命が一本の太い綱となり、その太い綱はどんな権力も脅しも断つことはできない。国家は時に虚妄の幻像で人を惑わす。だが愛の導き手が指し示すものは、ホンモノの自然のように勁く確かで、だが儚く去ってゆくのも宿命だ。

NHKBSスペシャル『旧街道を歩く～家族と向き合う旅～　仙北街道　父が見せたかった風景　菅原文太・加織父子』『男の料理～きょうの料理～　菅原文太の鶏の丸煮』
2020年2月4日午前9:00～放送予定（2月5日午前0:45リピート放送予定）